語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

ここから世界へ飛んだ！

ちょうど四十年前、札幌市が世界の注目を集めた冬季オリンピック（関連記事六ページ）。日本が唯一メダルを獲得したスキージャンプの下地は、こんなささやかなジャンプ台？　にあったといっても過言ではないでしょう。今でこそ下川町や余市町に少年団ができ、小学生のころからコーチの指導を受けながら整った台で飛ぶことに慣れています。ソチ五輪女子ジャンプのホープ、高梨選手も上川町のジュニアチーム所属です。でも物のない時代はみんなこうやって遊んでいたし、お下がりの木のスキー板にカンダハーというのも定番。これで十分楽しかったものです。

ひと街しごと No.38

・時の街角／旧島歌郵便局――2
・マチの博物館／みつるや　鶴の舞――3
・川筋を行く／創成川(完)――4
・来た道・行く道／履物の巴屋　いとう――5
・あるばむレトロポリス／札幌オリンピック――6
・道具で道草30年――7
・紙の話③――8

二〇一二年　冬（年四回発行）
発行：㈳印刷紙工
札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL（〇一一）五六一一三五九八
編集：ひと街しごと刊行会
札幌市中央区北一条西十七丁目　北海道不動産会館四階
㈲編集工房 海内　TEL（〇一一）六二三一六六五二

郵便を受け付ける窓口がオープンカウンターになったのはいつ頃だろうか
基本的な構造は現代とさして変わらないが、宿直室(左下)が珍しい

※参考文献「北海道開拓の村・開村10周年記念誌」

時の街角

北海道開拓の村から

そこをのぞくだけで何かの交流が生まれる
地域の郵便局の小さくて大きな存在
まして交通の不便な小漁村ではなおさらです
ニシン漁の浮沈も見てきた百年以上前の建物です

ニシン景気の頃は、網元が局長だった。

旧島歌郵便局――明治三十五年(一九〇二)建築

「日本地名大辞典一　北海道」(角川書店)で島歌という地名を引くと、一か所しか出てきません。所在地は瀬棚町。現在は大成町、北桧山町と合併してせたな町となっている道南の町です。島歌地区は、険しい山系が日本海へと落ち込む崖に沿って走る追分ソーランラインを、せたな町市街地から北の茂津多岬方面へ進んだ中間あたりにあります。

日本の近代郵便が始まるのは明治四年(一八七一)。北海道ではその翌年、函館に郵便役所のできたのが最初で、島歌には同十九年に郵便局が開設されています。

ここで紹介する局舎は明治三十五年に新しくなったもの。翌三十六年には電話事務も開始しています。当時は、今や伝説となった北海道でもニシンが捕れた時代。島歌地区一帯でもニシン景気に沸きました。各地から人が集まり、郵便物の取扱量も増加していったことは想像に難くありません。明治二十六年から十六年間、二代目局長を務めた畑野清治という人は、この地らしく網元として漁業も営んでいたそうです。

レプリカだが逓信省からの局長辞令

局で働く人は局長のほか事務雇員三人、集配人二人、逓送人二人もいたといいますから、今日の市街地の郵便局と比べても規模は変わるところはないようです。

さて木造二階建ての島歌郵便局です。柾ぶき屋根の形が、頂点から四方八方へ流れる方形(ほうけい)屋根といわれる寄棟の変形。お寺などに多いとされていますが、てっぺんの尖塔のようなものは、洋風を気取っているのでしょうか。

郵便業務を行う一階は、公衆郵便取扱所、郵便事務室、事務員宿直室、電話室、玄関兼集配・逓送人扱所および宿直室というシンプルな間取り。二階は物品庫になっています。火鉢一つの宿直室などはさぞかし寒かったことでしょう。

建物そのものにこれといった特徴はありませんが、海岸線にへばりつくように漁家と隣り合って建つ姿を想像すると、北海道の一つの時代が彷彿としてくるようです。

こんな建物が荒波寄せる海岸に
漁家と並んでへばりついていた
方形屋根の理由はよくわからない

マチの博物館

祝儀用品専門店
みつるや 鶴の舞
小樽市入船一丁目四―一五
（〇一三四）三三―三四三一

伝えていきたい、「水引」の美しさ。

若い人の数が減って結婚するカップルも少なくなり
結納というゆかしい慣習も薄れがちな昨今
美しい店名のショーケースに並ぶ結納品の数々は
幸せにと二人の女性が心を込めた手作りです

印刷したのし袋が多く使われるようになって、そもそも水引の飾りにどんな意味があるのかさえよく知らない人が増えたようです。その水引に最も気を配る結納品を、手作業で作り続けている「みつるや 鶴の舞」。小さな店舗にも三十二年の歴史がありました。

社長の小林郁子さんによりますと、結納品の製造卸を行っている「美鶴屋」の創業が六十年前。留萌でスタートし、現在は同じ入船地区の別社屋で二代目社長の弟さんが切り盛りしています。製造卸は道内でもここ一社しかなく、各地の問屋や小売業も量販店へと姿を変えたため、中国など外国製品も多くなりました。

水引は、和紙をこより状にして糊を引き、乾かして固めた飾り紐です。色も赤、白、緑、金、銀、こはくなど三十種以上。和紙のほか絹を巻いたものなどもあります。この紐で松や竹、梅、鶴、亀、海老、鯛を作って、贈答品や封筒に組み合わせて飾り付けていきます。生産地で有名なのは飯田水引（長野県）や伊予水引（愛媛県）、加賀水引（石川県）。こちらでは主に伊予の水引を使っています。

扱う商品は結納品を中心に祝儀袋や正月飾りなど、水引が必要なもの全般。女性ならではの細かい手作業ですが、小林さんには子供の頃から親しんでいる仕事。もう一人のスタッフ五十嵐洋子さんもこの道四十三年というベテランです。水引を曲げたり結んだりして「簡単なものは十五分くらい。ワンセット作るのに二時間以上かかることも」と小林さん。日頃から部品をたくさん作り置きしておいて組み合わせていくそうです。

水引にも流行があって、以前は大きなものが主体でしたが、近年はカラフルに、コンパクトにという傾向とか。松竹梅をオリジナルな組み合わせにしたり、色を変えてみたりと、アレンジにも余念がありません。

流行といえば、水引の需要にも世の中の動きの影響が。「若い人が減って結婚しない人が増えていますし、結納のしきたりを知らない人や省略してしまう人もいます」（小林さん）。大事な伝統は残していかなければと、結納品の長のしや目録を飾る松竹梅の意味を、改めて教えられました。

松は年中青々としていることからとこしえの繁栄、竹は真っ直ぐな成長、梅は寒い季節に一番に咲く花だから忍耐。もちろん鶴は千年、亀は万年――ああ、やっぱり日本人だなと感じませんか。

手作りで松竹梅、鶴亀のオリジナル

色とりどりの水引飾りが付いた祝儀袋のコーナー

作り置きしておいて組み合わせる

材料となる水引の数々

用途や金額に応じて
様々な型がある鶴や亀
細かい手作業をしのばせる

社長自ら手作り――小林郁子さん

ベテランスタッフの
五十嵐洋子さん

こんな祝儀袋をもらうとうれしい

豪華な結納品セットの一部

空に舞う鶴が目印の店舗

丁度、正月の縁起物を制作中。小林社長は筆文字もお得意

創成川 完

川筋を行く

人と川の様々なかかわりをたずねて

札幌市の最北、茨戸まで

開拓の労苦しのぶ記念碑 太平、篠路、屯田を流れて。

街の真ん中を流れる人工河川にもようやく両岸に緑が続いて動物の姿も見られるのがJR学園都市線（札沼線）をくぐったあたりから水郷・茨戸へと一直線に流れ込んでいきます

北４番橋から茨戸方向を見る

JR線に架かる新琴似跨線橋から、北に向かって見はるかす石狩街道（国道二三二号）の両側に広がるのが、左手が屯田、右手が太平と篠路という町。その両地区を分けるように創成川に沿うポプラ並木がまず目に付きます。

北大のポプラ並木が老木となり、平成十六年（二〇〇四）の風台風で倒木が相次いだ結果、にわかにクローズアップされてきたのですが、いつ誰が植えたかとなると知らない人も多いようです。

新琴似跨線橋とＪＲ札沼線が交差してすぐの北３番橋あたりのポプラ並木（上）

これは大正初期、篠路村学田部落（現・篠路町太平）の田畑が、屯田兵村からの牛馬の放牧で荒らされていたため、ことを穏便に解決しようと柵代わりに植えられたのがこのポプラでした。村人総出の緑化作戦が今日の景観につながったというわけです。

篠路・太平、屯田は明治期に屯田兵や入植者によって開拓された地区。その功労を今に伝える碑があちこちに建立されています。

篠路・太平で代表的なものは、太平開基百年碑（太平公園内）と篠路烈々布開基百年碑（篠路烈々布会館前）。前者は明治二十二年（一八八九）徳島、和歌山からの、後者は同十六年（一八八三）福岡県報国社の入植を記念してのものです。

上／篠路烈々布開基百年碑
右／太平開基百年碑
ともに篠路・太平の記念碑

また屯田地区では屯田七条七丁目に、その名の通りの屯田開拓顕彰広場があって、「屯田兵第一大隊第四中隊本部跡の碑」「篠路兵村開拓碑」「水田開発記念碑」「屯田兵顕彰之像」「馬魂之像」などがあります。加えて隣接の江南神社には篠路兵村移住記念碑や屯田開基九十周年顕彰碑なども。

屯田兵顕彰のブロンズ像モデルとなっているのは、中隊長の渥味直茂大尉。また馬魂之碑の礎石の下には屯田地区にあった馬頭観音や愛馬の墓石を埋設してあるそうです。いずれも昭和六十三年（一九八八）、屯田開基百年を記念してのものです。

こうした先人の労苦で作り上げた住宅地の間を抜けて、創成川が流れ着くのが茨戸川。西から琴似発寒川、東から伏籠川も流れ込んで来て、大きな水郷地帯を形成しています。ここが札幌市の最北。茨戸川は時折水門を開けられて石狩川に合流します。その石狩川はやがて日本海へ出て行きます。

下左／篠路兵村開拓碑、下右／水田開発記念碑
（ともに屯田開拓顕彰広場。右２枚も）

上左／馬魂之像、上右／屯田兵顕彰之像
まさに人馬一体となった開拓だった

江南神社境内にも歴史を物語る碑がある
左は創成川のゴール、茨戸の水郷風景

※参考文献／「北区エピソード史」「新・北区エピソード史」（札幌市北区）

来た道、行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ――
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦をお待ちしております。

鼻緒挿げに職人の技、夫婦で守り続ける三代百三年ののれん。

伊藤謙一さんスミヱさん――苫小牧市 履物の巴屋いとう

街で和服姿の女性とすれ違う度に、つい視線が足元へ。「草履を見て、ああ、うちのお客さんだと、お顔は覚えていなくても会釈してしまいます」というスミヱさん。鼻緒を挿げて四十年のベテランです。小学生の頃から店を手伝っているご主人の伊藤謙一さん（七二）は、鼻緒職人としてのキャリアがもう五十年以上――夫婦で「履物の巴屋いとう」三代百三年ののれんを守っています。

苫小牧に王子製紙の新工場ができるというので新潟からやってきた祖父が、現在の幸町で創業したのが明治四十二年（一九〇九）のことです。以来、街の歴史とも重なる百年の歩み。掘込式の苫小牧港が完成して街の中心が東へ移り、大型靴店の進出などで需要も一変しました。

「休むのは元日だけで、寝ないで仕事をした」と謙一さんがいうのは、企業の接待が盛んだった高度成長期。店の近隣には割烹が軒を並べ、花柳界の賑わいが履物の需要を支えました。「大みそかは深夜まで鼻緒挿げ。銭湯に行くのは年が明けて朝二時頃でした」と懐かしみます。

スミヱさんによりますと、当時は花柳界のお姉さんばかりでなく、一般のお宅でもお盆と正月は新しい着物に履物と決まっていたので、子供用の下駄を挿げるだけでも何十足と大変でした。

それが今や下駄も草履も区別がつかなくなり、鼻緒もヒモといわれる世の中。履物店としてはずいぶん生きにくい時代のようですが、お二人にはそはまさに職人芸。男物の下駄に女性用の鼻緒を挿げてほしいという、近頃の若者に感心する持ち前のセンスで、何百種類もある鼻緒と台の組み合わせへのアドバイスも的確です。

季節を問わず挿げ替えの注文もあり、地元はもとより伊達や室蘭、日高、恵庭、千歳、札幌方面、遠くは稚内などからも修理が持ち込まれます。

伺うところ、お子さんたちもサラリーマンで後継は定かならず。一方では鼻緒などを作る職人が次第にいなくなっており、「作る人が先に辞めるか、売る人が先かというところでしょうか」とお二人で笑いながら、お客さんとの履物談義や世間話がまだまだ楽しそうです。

草履も下駄もすべてここで鼻緒を挿げる職人の技

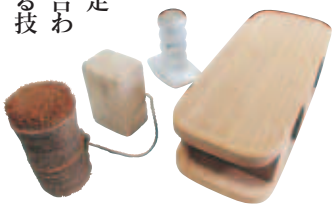
昭和10年頃の店舗。ご主人もここで誕生

上は蒔絵入り
下右は津軽塗り
下左は鎌倉彫りの雪下駄
もはや残り少ない貴重品だ

桐下駄の台には
当店の紋が入る

和装はきもの専門店
履物の巴屋　いとう
苫小牧市大町1丁目1の7
TEL（0144）32-2606

鼻緒を挿げる道具一式
「小山」は旭川にあった履物問屋


下駄の台をみがく道具
植物繊維のブラシや
ロウ石など〝現品限り〟

国道36号線に面している店舗

色とりどりの履物が並ぶ店内。選ぶのが楽しい

札幌オリンピック記念の花電車（昭和44年４月）

札幌オリンピック

国際都市へと飛躍の契機。

ちょうど四十年前の昭和四十七年（一九七二）二月といえば七十代、八十代の人でもまだ記憶は鮮明でしょう
アジアで初めての冬季オリンピックの開催地となった札幌市世界中の注目を集め、国際都市へと発展する契機ともなりました。

昭和47年（1972）２月３日、今でも鮮明な開会式
２人の聖火最終ランナーは辻村いずみさんから高田英基君へ
（写真５枚とも札幌市文化資料室提供）

札幌オリンピックの記憶として一番に挙げなければならないのは、七〇メートル級ジャンプでの笠谷、金野、青地三選手の表彰台独占ですが、ここではまず当時の街の様子から。

オリンピック目指して急ピッチで進められたインフラ整備のうち、最大のものは地下鉄と地下街の建設と言っても過言ではないでしょう。地下鉄は開幕前年の昭和四十六年十二月、南北線北二十四条―真駒内間が開通。雪国にふさわしい交通機関として、その後も延伸、新線の敷設が続くことになります。

人口の増加も急で、札幌招致が決まった昭和四十一年には八十三万人だったのが、同四十五年にはもう百万人を突破し、オリンピックの年に政令指定都市に指定されました。世界で半年間も降雪のある百万人都市は札幌ぐらいで、雪まつりなどと合わせて国際都市としての成長もこの時代に約束されたといえます。

大通公園のオリンピック案内板
街中に熱気が漂っていた

さて競技の方は、日本人のメダル獲得は先の三つ以外にはなく、目立った活躍はありませんでした。それでもフィギュアスケートで尻もちをついて三位になったアメリカのジャネット・リン選手や、スピードスケート男子で四種目のうち三つの金メダルを取ったオランダのアルト・シェンク選手など、世界の冬のスポーツの祭典を存分に楽しめた十一日間でした。

各種目の会場となった真駒内の屋内外競技場や月寒、美香保の両体育館、大倉山と宮の森のジャンプ競技場などは今日でもメモリアル施設として十分に機能していますし、選手村も拡大を続ける札幌の住の受け皿となっています。

あれから四十年が経過して札幌市の人口は二百万人を目前。道民の三人に一人は札幌市民という時代ですが、増加スピードは当時と比べて格段に遅くなっています。雇用や就学ばかりでなく、便利な都市機能を求めてくる人も多く、それだけ高齢化も進んでいるということにも。東京都のように、もう一度オリンピックをという機運は盛り上がるのでしょうか。

２月13日の閉会式は真駒内アイスアリーナで
あれから40年が経過した……

道具で道草30年

晩秋の日、庭の落ち葉を集めながらの止めどない思い
命を絶やさないための自然の仕組みに感心しながら
人間世界は映らないはずのアナログテレビが映る不思議さ

坂一敬

移ろう時代に残るものは……。

冬が近づくと我が家の小さな庭の木樹も、一斉に葉を落として冬支度をしていく。

落ち葉が何層にも積もり、地面が全く見えなくなる。まだ緑色をした葉や、茶色に枯れたもの、そしてなお赤く鮮やかな紅葉の葉。

ビニールの大きな袋を取り出して、落ち葉を集めてゴミに出そうかと思い、落ち葉の塊をめくってみた。すると地面の窪んだところに、なんと「かまどうま」が二匹並んでいた。もう寒いので動きが鈍くなっているのか、それとも天井代わりの落ち葉がいきなり無くなったので、驚いて動けないのか、飛び跳ねもせず私のほうを見つめている。さらに「むかで」があわてて落ち葉の下に潜り込み、「わらじ虫」も移動を余儀なくされて迷惑そう。

人間にとってはゴミでしかない落ち葉も、庭の虫たちにとっては、越冬のための大切な住居の屋根代わり。裸ではいくら虫でも凍えてしまう。そして地面に落ち、腐れば大地を豊かにする天然の肥料。虫たちも、死ねば樹木にとっては大切な動物性タンパク。地表をアスファルトで覆い尽くすことによって枯葉は腐らず、風に舞うだけのゴミ、昆虫も生きてゆけない。ひいてはそれを餌にしていた小鳥たちも、餌不足で姿を消して行く。

アスファルトの砂漠へただただ進んで行く我が街。そう思うと、落ち葉を集めてゴミとして出すのはやめることにした。

代わりに、割と暖かいので庭のテーブルにお茶とおつまみを並べ、しばし物思いに耽る。

「散りてなを　庭を飾れる花紅葉　小春日和の青空の下」

生存競争に勝ち、あらゆる生物の上に君臨したからといって、他の生き物に対して何をしても良いというものではあるまい。

だが現実は人間のやりたい放題。童謡「ふるさと」に唄う「うさぎおいし」かの里山も、崩され造成されてコンクリートの建築群と化し、「小ぶなつりし」小川も埋め立てられてアスファルト舗装の道路となり、もはや見ることもできない。我々は故郷を失ってしまったのだ。そして代わりに何を得たのだろう。

何万点あるのか、数えることも不可能なコレクション
その一つに下の木製家具調のカラーテレビがある

亡き母が「タイソウ花」と呼んでいた濃いピンクの花を咲かせる花がある。花が咲いて種ができ、それが地面に落ちてまた芽を出してといった繰り返しで、一年に何回も咲く花である。普段は三十センチぐらいにならないと花は咲かないのだけれど、この時期とてもそれまで待ってはいられないとばかり、十センチくらいで花をつけ種を作る。花も自分の子孫を残すべく、ちゃんと考えているのだ。

ジャックなしでも見事に映る!!
レトロスペースの面目躍如だ

植えたわけではないのに、どこからか種が飛んできてうちに住みつくことになった「つる」（名前は知らない）がある。少しずつ大きくなり、始めは陽のあたる南の方につるを伸ばしていたのだけれど、そこには巻きつく物が何も無い。どうするのだろうと眺めていたら北の方につるを方向転換した。そこには石の柱があり、最初の一本が巻きつくや、次からつるは南ではなく全て北の柱を目指すようになった。

「つげ」の樹が玄関の左側にある。それも最初は南のほうに枝を伸ばして行ったのだけれど、邪魔になるので切ったところ、今度は邪魔にならない北の方に枝を伸ばしている。「つた」も、「つげ」も、彼等なりに考え、あるじと調和して生きようとしているのだと思うと、いじらしくなり、そのままにしている。

七月、TVが地デジ化された。テレビの画面ではカウントダウンして、早く地デジ対応のテレビを買えと日夜PR。我がレトロスペースにある昔の木調のテレビ。電気屋さんに聞くとこれは初期のもので、差し込むジャックがついていないのでチューナーも使えずダメと言う。レトロはいろんな人が来るので再度聞いてみると、地デジ用の電波をアナログに変換すればジャックは必要無い、映ると言う。そうしてもらい旧型テレビは今も映っている。

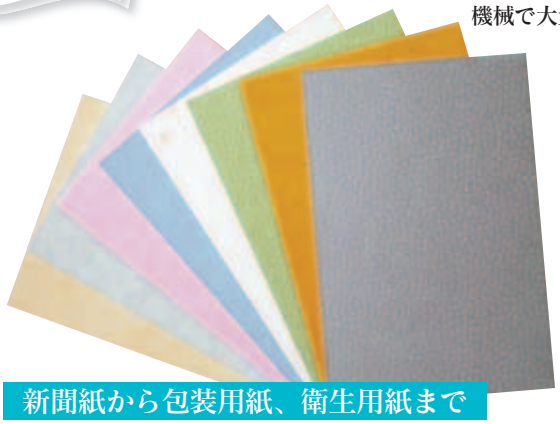
晩秋の陽は暮れやすく、そして寒い。家の中に入り、ストーブの薪に火をつけ考えてみたい。窓の外には果てない闇ばかりが広がっているのだろうか、それとも……。

レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品・開発部長）

※レトロスペース・坂会館／札幌市西区二十四軒三条七丁目　TEL（〇一一）六三一一五六五六

紙の話 3 「紙」といえば洋紙のこと

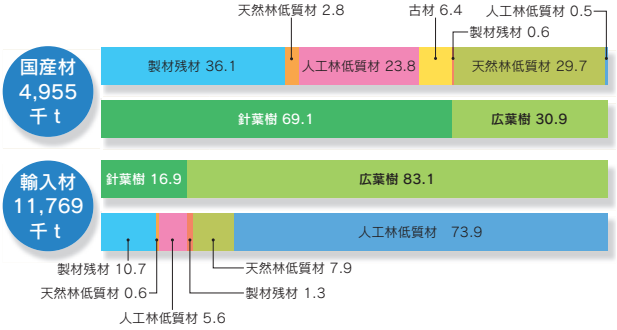
洋紙とは、コウゾやミツマタなどにネリを加えて作る和紙以外の紙の総称です。普通は紙と呼ばれて、機械で大量生産するもので、用途で大きく「紙」と「板紙」に分けられます。



木材や古紙から作る

洋紙は木材や古紙のパルプ(繊維)から作ります。木材パルプは、針葉樹や広葉樹を小片(チップ)化し、化学処理してパルプを抽出。漂白、薬品添加などを経て、機械にかけて抄きます。古紙も水に溶かしてから化学処理などを行っていきます。

●パルプ材の原料ソース別構成比(2010)　(%)※資料：日本製紙連合会



新聞紙から包装用紙、衛生用紙まで

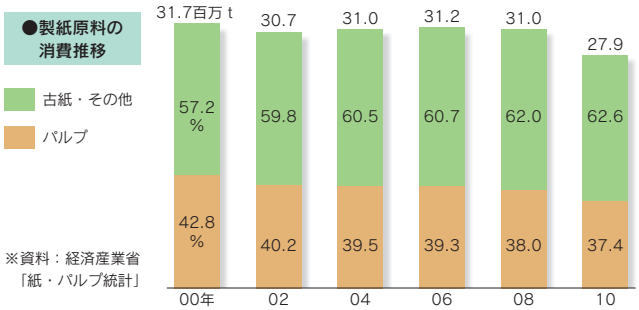
【紙】
1．新聞巻き取り紙＝新聞紙
2．印刷・情報用紙＝印刷用紙、葉書、複写原紙、感光紙など
3．包装用紙＝クラフト紙など
4．衛生用紙＝トイレットペーパー、ティッシュペーパーなど
5．雑種紙＝書道用紙、たばこの葉巻など

【板紙】
1．紙器用板紙＝菓子箱など
2．ダンボールの原紙など

紙の60%は再生紙

原材料として使われる木材パルプと古紙とではどちらが多いのかというと、2003年以降、古紙がずっと60%台を占めています。日本の古紙回収率は世界第3位。印刷物によく表示してある「再生紙」ですが、紙の多くは古紙をリサイクルして作った再生紙ということになります。省資源から再生紙利用は望ましいことには違いありませんが、長期保存という点では、木材パルプで作られた紙が適しているようです。古紙には様々な紙の混入が考えられ、耐久性も確かめられていないからです。

●製紙原料の消費推移



※資料：経済産業省「紙・パルプ統計」

本づくり質問箱

本づくりの「?」にお答えします。
お気軽に質問をお寄せください。

Q 自分史づくりに取り掛かろうと構想を練っているうちに、我が家の先祖はどこに住んでいたのか、両親から何も聞かされていないことに思い当たりました。それならいっそルーツ探しから始めてみようと思うのですが、どんなことをすればよいのか教えてください。

我が家のルーツを探したい

A ルーツ、つまり根っこですね。例えば北海道限定でしたら、大方のお宅は古くは開拓入植で来たか、屯田兵だったのか、それとも北の大地に憧れて来たのかというところでしょう。でもルーツはそれ以前の家系や住んでいたところ。やはりどうやって探せばということになります。

そこで第一歩は自分の戸籍謄本と除籍簿を取り寄せることです。本籍地の役所に請求すればすぐにできます。それでわかる祖父母のことをたよりにさらに戸籍をさかのぼっていけば、新しい展開があるはずです。親戚筋などに問い合わせてみて、知っていること、思い当たることを聞くのもよいでしょう。

こうしてある程度進んだら、次は機会を見つけての“現地調査”。本家や旧家を訪ねて話を聞きながら、さらに系図を固めていきます。菩提寺がわかればぜひ訪ねてみて、過去帳から関係者の没年月、続柄などがわかれば大きなヒントになります。

●出前でアドバイスを
自分史など本をつくりたいと考えている人のために、印刷担当者と編集者がお伺いしてアドバイスいたします。グループでもどうぞ。お気軽にお申し込みください。

●記念誌で歴史を残す
企業や団体が二十年、三十年と歴史を重ねていくうちに、人が変わったり資料が散逸したりします。節目の年に記念誌の制作はいかがですか。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承ります。

●小紙をお送りします
慌しい毎日に、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙です。ご希望の方に無料でお送りしています。印刷紙工までお申し込みください。